

中川 渚

1. 事業実施の目的

パコパンパ遺跡複合出土土器の分析

2. 実施場所

ペルー共和国カハマルカ州チョタ郡パコパンパ村

3. 実施期日

平成 30 年 1 月 9 日（火）から 2 月 23 日（金）

4. 成果報告

●事業の概要

パコパンパ遺跡はアンデス形成期の祭祀センターであるが、周辺にはパコパンパ遺跡と同時代に機能していたとみられる遺跡が複数知られている。特にラグーナ遺跡、カピーヤ遺跡はパコパンパ遺跡の至近に位置しており、国立民族学博物館とペルー国立サン・マルコス大学の共同プロジェクトによる発掘調査が実施されている。また、同じくパコパンパ遺跡の至近に位置するコチェ・コラル遺跡、ミラドール遺跡でも、共同プロジェクトによる一般調査で土器が採集されている。これらの遺跡はすべてパコパンパ遺跡から 1km 以内に位置しており、個別に機能していたと考えるよりも、遺跡複合として捉えたほうが、社会展開をよりよく理解できると考えられる。今回の調査では、パコパンパ遺跡複合の社会プロセスを明らかにすることを目的として、パコパンパ遺跡の土器分析結果を参照しながら、周辺遺跡から得られた土器の分析を行った。

●本事業の実施によって得られた成果

ラグーナ遺跡、カピーヤ遺跡、ミラドール遺跡、コチェ・コラル遺跡、そしてラグーナ遺跡とカピーヤ遺跡の間に位置し、昨年発掘調査された DG 区より得られた土器を分析した結果、I 期の土器のタイプ構成は、複雑な図像を有するものも含めてパコパンパ遺跡と同様であることがわかった。一方で II 期には、おおよそ限られたタイプ構成となる傾向が見られた。さらに遺構の検出状況も鑑みると、パコパンパ遺跡複合は、I 期には複合全体として活発な活動が行われていたが、II 期になると活動が主にパコパンパ遺跡に集中するようになったと考えられる。特にリーダー層確立後の II 期に、大量の土器を用いて行われた饗宴は、パコパンパ遺跡のみで実施された活動であるとみられる。リーダー層の出現によって、遺跡複合のあり方に変化が起こったと考えられるのである。すなわち、I 期では遺跡複合全体として祭祀的な機能を有していたが、II 期にはパコパンパ遺跡の権威や権力が増大し、新たな祭祀建築にかかる労働力はパコパンパ遺跡に集中的に投入されるようになった。多様なタイプの土器もパコパンパ遺跡に集中し、それらの土器を用いて、権威を象徴するような儀礼

(饗宴)がパコパンパ遺跡で行われた。パコパンパ遺跡の権力が強まり、求心力が高まった結果、中心地化が起こったと考えられるのである。

本成果は、2018年5月27日に開催される日本考古学協会第84回総会でポスター発表する予定である。

●本事業について

フィールド調査や遠方での学会参加など、研究を進めるにあたってはお金が必要になることが多く、大学としてそれをバックアップしてもらえるこの事業は、学生にとって非常に助かります。今後も同事業が継続されることを強く望みます。